

主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私たちは作家一人一人が創作を自由に発表できる場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思ひます。
私たちは世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒144-0047
大田区萩中3-14-8
山崎 弘方 TEL / FAX 03(3742)5182



宮林さわ子 木炭によるドローイング

「森芳雄・私・主体美術」

山崎 弘

もう40年以上前の話になるが、学生のとき私より上の学年はアンチ公募展の人が多かった。が、私たちは先生方に、同人展だけでなく他流試合もしなければダメだと言われていたので、公募展を覗いて回った。それだからか今でも公募展に出している同期生は多い。

卒業後私は森芳雄に師事することを許された。アトリエで目の不自由な先生の手伝いをしながら作画に立ち会わせていただいていた。また多くの展覧会にもお供した。展示作品に近寄って真剣な眼差しをされていた先生は、『画は画から学ばんだ』とご自宅に帰られてから私に対して且つご自身に言い聞かせるように長時間語られる。その日の展覧会の感想とそれにまつわる話から始まり、世界情勢、政治経済、ご自身の信条などあらゆることに派生するのだが、最後は見事に画の話に着地する。『今日の講義はここまで』——— 夜の12時を過ぎることもあった。

それらのかけがえのない時間のなかで、私は画に対する先生の厳しい取り組み、造形の秘密、画家としての姿勢を学ばせていただいた。『画描きである前に人間であれ!』

そのような中で公募展である主体展に応募した。初応募全落、次の年も全落。自分のすべてが否定された思いがした。しかし、森先生は見てくださったので、自分が求める絵を探りながら描き続けることができた。

私が会員になって間もない時期、“大グループ展問題”が起き、主体は大きく揺れた。大きな衝撃だった。身の引き裂かれる思いをし、苦しんだ。(代表者の苦悩は計り知れない…) このことについては、“主体美術の30年”の主体美術協会小史にある。【会を揺すぶった出来事は、主体

の精神、姿勢に対する警鐘と受け止め、作家個々の集団としての主体を検証自省して再出発の時とし、会の総力をあげて取り組んだ。】

いつだったか学生のころからの友人の個展の展示を手伝った後、お互いの所属団体の話になった。「主体は仲がいいんだってね」と言われたとき私は「ヒエラルキーが無いから」ととっさに答えた。そのとき、「森芳雄の精神が生きているんだ」と友人に言われたのが嬉しかった。

一昨年(58回展)のレセプションの挨拶で立軌会の画家笠井誠一氏が、“森芳雄、大野五郎、末松正樹、吉井忠、寺田政明の人間的なものが、表現は異なるが今も脈々と流れている”と話されていた。また、昨年(59回展)は春陽会の画家入江観氏が、同じ団体展の危機に触れ、同会とも拡大主義にさしかかっていると提言された。

主体美術は創立時から話し合いによる民主的な会の運営を基本姿勢にしている。創立60年を迎え、世代が変わり、絵画の表現方法も変わってきて、多様なものが認められるようになった。しかし、主体美術の根底に流れる創立の精神、理念は変わることはない。ぶれるたびに修正し、絶えず自浄、自戒を繰り返してきた。それは、会員一人一人が自分の絵画を追求し確立しようと懸命な努力を重ねてきたからだと考えられる。森芳雄が『美の本質に向かって追求する目的を失わないでほしい』と常々言っていたことと重なる。

主体美術は今年第60回記念主体展を開催する。創立に携わった会員はいなくなったが、自己の立ち位置をしっかりと定めた、民主的で活力のある作家集団でありつづけたい。

2025.5 No.116 CONTENTS

- 1p 巻頭言 ……山崎 弘
- 2p 第59回主体展審査について ……山崎 弘
- 3p 第59回主体展陳列について ……藤本 卓
第59回主体展研究部から ……井上 樹里
- 4p 巡回展報告(名古屋) ……竹内小夜子
- 4-5p 惜別 水野博子さんを偲んで ……田中 和枝
惜別 石井晴子さんの思い出 ……松本 恵美
惜別 松井豊氏回想 ……矢野 利隆
- 6-7p 2024年新会員紹介
遠藤 照美 檀原 恵子
藤木もとひろ
第59回主体展受賞者紹介
- 8p 第60回記念主体展 企画展示
没後20周年「大野五郎展」
- ART WAVE
- 9p ●アトリエ訪問 vol.14
宮林 さわ子さん(愛知県)
……文ノ久我 英輔
- 10p ●フォトエッセイ
山崎 清子(神奈川県)
- 11p ●各地の美術展から
「たいせつなもの」
新収蔵作品展 2015~2019
神奈川県立近代美術館鎌倉別館
……櫻本香菜子
- 12p インフォメーション
展覧会記録・編集後記・その他

第59回主体展報告



▲審査最終日集合写真



▲9月8日に開催されたクロッキー会



▲レセプション(都美術館内レストラン)



▲審査の様子



▲審査の様子



▲レセプション来賓の入江 親氏のごあいさつ

第59回主体展審査について

事務局展覧会部(2024年度) 山崎 弘

第59回主体展の審査は8月22日(木)から24日(土)までの三日間をかけて、東京都美術館地下3階の審査室で行われた。今回はこの時期に日本各地で豪雨や台風の影響で参加人数が危惧されたが、三日間で各係を含め、のべ約210名もの会員が集まることができた。

審査に先立ち、まず事務局責任者が進行係と入念に打ち合わせをした。次に例年通り審査方針と内規を確認したが、今年はそれに加えて将来構想の基本理念(五本の柱)を責任者が読み上げて審査に入った。これはとても大切な時間である。主体美術の精神と方向性が逸れないため、主体美術の理念を再確認するため、一人一人が審査前に自身に問い確認するのである。

主体美術の審査は、参加した会員全員で行う。会員歴の長短にかかわらず、責任をもって自由に意見をいう事ができる。一年間精魂込めて描いた作品を一枚一枚丁寧に観、議論を尽くしてから多数決により決める。これが主体美術の審査の原則であるし、また審査に参加することは全会員の権利であり義務である。

たとえ意見を言わなくても、出てきた作品に真剣に対峙し、自分がぶれないで強い意志を持って諾否を決めることが求められる。その意思表示が自分の意見である。

一日目は一般部門の入落、二日目は一般部門(一日目に終わらなかった作品)の入落と新人部門(審査基準は一般部門と同一)の入落を決めた。次に佳作作家を決めたが、これは佳作候補の声が掛かった作品に対して、声

を掛けた会員が責任をもって推薦理由を述べ、それに対して皆で議論し採決をした。

三日目は佳作作家に決まった作品を一名分ずつ作家単位で審査し、作品についての意見を全体に問い、秀作か否かをさまざまな角度から議論し、決めた。次に新人部門から新人賞を決め、審査を終了した。

結果、入選者86名(うち2点入選17名、新人部門13名、初入選14名、佳作作家8名、秀作作家19名、新人賞4名)が選ばれた。

8月31日(土)作品陳列後、会場投票と総会での承認により秀作作家の中から新たに3名の会員が誕生した。

今回の審査中、ある一枚の作品を前に少々時間をかけて議論があった。現在はネットを繋げば溢れるほど情報が得られる。この実体験を伴わない(リアルな体験なしの)作画の是非についてである。今後このような作品が増えていくことは考えられるので、引き続きの課題であろう。また、初応募に対する扱い、佳作作家から秀作作家決定のプロセスにも改善の必要を感じる。

新たに改善していくべき課題はあるが、変えてはならない主体美術の精神を誇りとし、活気ある展覧会にするのは我々会員一人一人の責務である。

(2024年12月)

第59回主体展陳列について

展覧会委員 藤本 卓

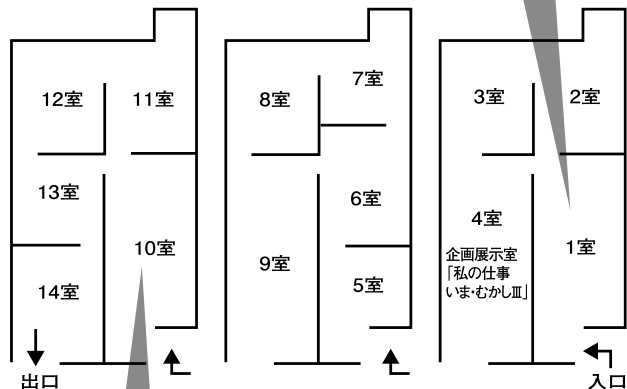
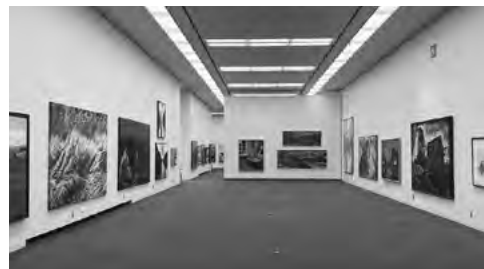
本展覧会では、1月に大まかな計画策定、6月に企画室・規格外作品の確認・展示方針の決定という段階を踏んだうえで8月の具体作業に臨んだ。展覧会委員は續橋守、長沢晋一、返町勝治、福田玲子、藤田俊哉、藤本卓、山本靖久の7名。さらに事務局立ち会いとして齋藤典久、黒川洋の2名が参加した。

今回の展示方針は「会員と一般出品者を分ける」「ゆるやかな傾向別展示」を基本に、会員は1室:具象(規格外)、2・3室:具象、4室:企画室「私の仕事 いま・むかしⅢ」、5・6室:具象、7・8室:具象→抽象へのゆるやかな変化、9室:抽象(規格外)とした。また、一般出品者は10室:秀作作家、11~13室:具象、14室:抽象とそれにマッチした作品、とした。

8月22日の会員搬入後、陳列計画用の作品を撮影し実寸の1/50スケールの作品画像チップ(紙片)を作成。それらを8月24日に、やはり1/50スケールの会場平面図上に並べながら、よりよい会場効果のために適切な陳列配置を模索した。しかしながら日美がそれに応じた配置をしても、8月31日の現場ではやはり修正の必要が出てくる。図面上の想定と、実際の展示空間の印象とで差が出るのはある意味当然ともいえる。31日作業当日は、委員同士協議しながら、一部屋ごとに作品配置の修正を行っていった。その過程でご協力を頂いた陳列手伝いの会員諸氏にはこの場を借りてあらためて御礼申し上げたい(当日は台風接近のリスクが迫っていた)。特に一般出品者の部屋においては、具体的な配置案がない状態から、配慮と工夫を凝らして陳列ベースを作っていただく必要があり、この点についても深く謝意を申し上げたい。

このような経過で、今年も9月1日に無事初日を迎えた。鑑賞者の反応は企画展示を含めておおむね好評であったが、会場を見渡し、様々な感想を聞く中で、成果と同時に課題もあると感じている。特に一部部屋の空間に対して作品の内容・密度が対応できていない状況があったことは素直に認めたい。この点について改善を進めるならば、現状の審査方針の検証も含めて広い視野での見直しが必要になる。「現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくこと」を標榜する主体美術であるからこそ、基本理念にしっかりと向き合いながらも、同時に硬直することなく時代を見据えた柔軟な運営も求められる。今後多くの会員の主体的な参画をとおして、よりよい課題解決のための知恵と努力が集まることを切に願っている。(2024年12月)

1室



10室

第59回主体展 研究部から

研究部 井上 樹里

本年度は会員によるアーティストトークを9月1日にコロナ禍以降初めて再開した。会場内の自作の前で登壇者が語り、延べ150人の参加となった。主体展の会員は北海道から九州まで全国に跨るが、今回は岡本裕介(京都)、豊福光行(大阪)、水戸麻記子(北海道)の3名に各々制作の経緯や作品についてお話しいただいた。アーティストトークは各人約20分であったが、参加者からの質問に答える時間では、登壇者と質問者の見事な掛け合いもあるなど会場は一体感に包まれた。

同日開催の会場研究会には延べ62名の出品者に参加いただいた。台風の影響から、会員、出品者共に参加者人数は例年と比べ少なかった。しかしながら出品者が直接作品を前にしながら会員と語れる貴重な交流の場ということから、会場は親密で熱量のある空間となった。特に天候の影響がある中にも関わらず秀作作家、新人賞の作家が集まったことは出品者の強い意欲として受け止めた。

会員、出品者、来場者との対面して交流できる会期中のイベントは、会への理解を広める貴重な機会と改めて認識を深めた。

天候不良の中にも関わらず、会場イベントの運営にご協力いただいた会員、ご参加くださった出品者の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。(2024年12月)



YouTube動画[第59回主体展ぶらぶら鑑賞]のご案内

チャンネル登録をお願いします!

X (旧ツイッター)
フェイスブック
インスタグラム

<https://www.twitter.com/shutaiten>
<https://www.facebook.com/shutaiten>
<https://www.instagram.com/shutaiten>

主体美術協会チャンネル

上のキーワード検索、
または右のQRを
スマホで読み込んで
ください。



巡回展報告

名古屋展

事務局 竹内 小夜子

第59回主体巡回名古屋展は10月8日(火)～14日(月)の7日間愛知県美術館のABCD室で開催しました。

搬入作業は他地域から事務局を入れて8名の方が参加してください、アルバイト10人と中部の人達で行いました。日美の車から8階展示室へ運び、東京展に準じた配置図通りに並べます。改めて作品を見て、横、周りとの関係で一点一点場所を決めていきます。午後5時半、最終的に155点の位置が決まりました。今回はA室に可動壁1枚を入れ、他の室は2枚ずつ使い、11の区画を作り展示しました。壁面にあまり余裕はなかったのですが、2段掛けはありませんでした。この作業はとても大変であり、東京展の展示の苦勞が分かります。しかし、やりがいもあると思いました。名古屋展の展示を見た人から、一枚一枚の絵の良さが引き立つね、という言葉頂きました。

会期中は他地域の会員が多く来てくださり、又知り合いの方にDMを出していただき感謝します。目当ての作品を捜している人の為に今年は作品部屋明記表を作り、受付に置きました。「だれだれさんの絵、何処?」と聞かれても、直ぐに答えることができました。

新聞などで障がい者無料、シルバー500円の記事を見て、多くの方が手帳を見せて入場されました。入場者数は1323名(昨年1225名)でした。1日会期が長い分多かったです。

搬出は15日9時半から行いました。アルバイトを8人頼み、前日に一部屋に集めた作品を1階搬出口に運びました。京都方面の作品は14日に搬入出業者のムーブさんが取りに来たので、残りは東京方面と中部の作品です。



名古屋展
会場風景



最近は仮縁が無い作品が多く、日美さんも傷を心配して、間にダンボールを挟んで車に入れていました。車に入れる時が一番大変で時間も長かったです。12時には全部積み終わり、傷チェック表、搬出表を日美さんに渡し完了しました。

中部会員全員無事に作品を送り出しホッとしました。来年又、沢山の会員の方に名古屋展を見に来ていただきたいと皆で話し合いました。

(2024年12月)

惜別 「アトリエの窓… 水野博子さんを偲んで」

田中 和枝



あっという間だった。新型コロナウイルスに感染し、余病を併発して3週間後、水野博子さんはいなくなった。とても東京は行けないからと、主体展の審査と一緒に泊まるはずだったホテルのキャンセルを頼まれた後、10日も経たないうちに。

彼女と私は今日まで同じよう

な道を歩んできた。初めての出会い、45年前。主体美術

の塚田重明先生の教室だった。初出品から40年近く、共に主体展に出ている。

私より10歳年上の彼女は芯の強い、頼もしい人生の先輩だった。ワインが好きでいつも元気で太陽のような人。作品に対してポジティブでいつも大作を描いていた。

我が家から彼女の家までは自転車で5分足らず。お互いオペラが好きで、彼女の好みはドミンゴ、私はカレーラスで、お互い譲ることはなかった。CDを交換したり、誘い合ってコンサートホールに良く出かけていた。いつも大好きな音楽が鳴り響くアトリ

エで彼女は制作していた。

近くを通る時は白いアトリエの窓を見た。そこには色鮮やかなピンクの花が咲いていた。主人(あるじ)がいない今は花もなく、窓が開く事もない。

彼女が逝ってから4ヶ月。まるで実感がなく、そのまま登録している携帯電話はその気になれば、いつでも彼女の声が聞こえるような気がする。(2024-12-7記す)

(2024年8月7日永眠)



「私的なROAD」 162×224cm (2024年第59回主体展)

惜別 「石井晴子さんの思い出」

松本 恵美



石井さんとの出会いは私がまだ主体に出品して間もない頃、懇親会で年齢の話になり、彼女の年を聞いたら、次女の姉と同年。それが何とも親近感を感じて、「お姉さんだ!!」と。

一緒に主体の仲間とグループ展をやったり、彼女の家(アトリエ)に何人かで伺って、美味しい秋田のきりたんぼ鍋をご馳走になったりと、懐かしい思い出がよみがえります。ふるさと秋田の美術館でやったご夫婦(ご主人は独立展の会員'23年逝去)の展覧会に、原田さんや、今は亡き本木さん、細矢さんで行った楽しい秋田での思い出があります。

150号や、200号は自分で張れると言っていたのには、130号を張るのが精いっぱい私には、驚きでした。

今年('24年)春のお彼岸に石井さんと水戸部さんと3人で、桶川にある本木さんのお墓参りに行き、「自由」と書かれた墓石の前で、コーヒーを飲みながら、思い出話をしました。それからわずかの月日。8月中旬主体搬入間近の時にラインで「病気を宣告されたけど、心配かけから、他の人には言わないで事務局の齋藤さんだけに」と、気遣いの人でした。よくなると信じていました。

最後に会ったのはいつだったか? 国立新美術館会場で偶然ばったり、カフェでお喋りしました。何年か前に「主体仲良し」という名前で本木さん、石井さんと私の3人のグループラインを作ってくれて、これで3人一緒に会話ができると。コロナで大変な時、

ワクチン予約できたとか、他愛のない会話でした。本木さんが亡くなってからはグループラインのやりとりは無くなりましたが、2人からメールが来るような気がして、今でも解除できません。

作品中の、都会のビルや不思議な建物を背景にして佇む女性達はなぜか憂いを含んでいます。よく犬のダルメシアンが登場するのは、彼女達を守っているのでしょうか?

59回展は200号の大作、はじめは小さく気が付きませんでした。画面中央にある信号が赤でした。なんで赤に? 彼女の心情を思うと何とも切なくなります。

軍医だったお父様は南方の島で戦死、幼い娘さんも病気で亡くされたり、生きるという事は喜びと同時に悲しみと隣り合わせ。でも最近2人目のお孫さんが生まれたと。会えたのでしょうか?

前の年に亡くなったご主人の後を追うように、いつの間にか逝ってしまいました。まだまだ沢山話したい事ありましたのに。



「共存への道」P200
(2024年第59回主体展)

惜別 松井豊氏回想

矢野 利隆



大方の画家がヨーロッパを志向する中で、何故か松井さんは南米に出かけた。

絹こすりに始まる生活から遁れて新しい仕事を求めたのか、唯単に異質の世界に触れたかったのか、本当の意図は判らない。後先をのことを考えないで、片道切符の無鉄砲大胆な行動とも言える。

その後主体美術協会の創立に参加する。新しい集団の出発に皆、熱に浮かされた。そして絵を描き、酒を飲み議論した時期である。

ベサメムーチョを唱い、彼も南米仕込みの踊り(?)をすれば、みんなは滅茶苦茶踊りでそれに応じた。そんな時期に私と松井さんの交遊が始まる。

当時主体美術には図録を作る余裕もなかったが、それに代わる機関誌を出していた。他の団体には見られない刊行物だった。ここで創作活動にかかわる問題をテーマに次々と取り上げた。

機関誌の何号かで作家相互が作品論を書く企画があった。その一つに松井豊論があり、私が割り当てられた。断りを入れたが抗し切れず結局受けることになる。

当然のように何が何だか判らぬ奇妙な駄文が出き上がった。加えて印刷ミスもあって二重三重に恥を晒す結果に終わる。その私が再び松井さんを書く。どのような巡り合わせだろうと思う。

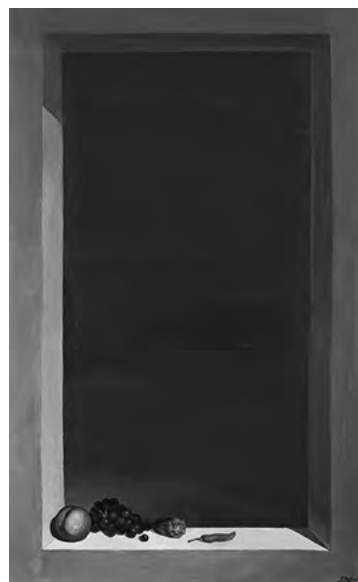
松井さんは「土に帰る生の営み」を原点にして、裸婦像(自分?)にイメージを託して描き続けていた。人物の前には常に一枚の空の皿が描かれて、どこかエロスを匂わす不思議な幻想空間を作り出していた。

その後対象がピエロに変わって行くが、そこでもエロスの気配とタナトスの相関を影に置いた仕事を続けている。

54回主体展の作品「窓辺」では、人物が画面から姿を消し、窓枠と壁だけの何か寂寞とした空間が広がるのみで驚かされた。「自分のやりたい事をやり切ったから、これで全て終わり…」と自ら語り、締めくくって自身の最終作品に松井さんはしたのだ。

この「窓辺」を描くことで全てにピリオドを打って、自身を納得させたかったのかも知れない。

語り合える希少な先輩であり友人の松井さんが逝ってしまった。自分の人生を静かにまとめ上げて姿を消していった人のように思える。



「窓辺」M50 (2018年第54回主体展)

2024 NEW MEMBER

新会員紹介

第59回主体展にて会員に推挙された方のプロフィールです。今回は3名の新会員が誕生しました。おめでとうございます。

まず、自作について語っていただき、会員になってやりたいこと、抱負を語っていただきました。

皆さん、今後ともよろしくお願いいたします。

(五十音順・敬称略)



第10室



「いのちI」 F80

遠藤 照美 (えんどう てるみ)

■出身地

山梨県

■制作に使う主な素材

油彩



■自作について

夏、畑一面に背筋を伸ばし力強く咲くひまわりに希望、勇気、元気を貰う。夏から秋へ向う時力サカサに枯れた葉が幹を包み、下の葉が大地を掴み瘦せた体の杖となり、頭には黒い種を顔一杯に宿らせ、重さに堪え大地を見つめる。ひまわりの終焉。一面のその姿はまるでひまわりの墓標の様な光景。次の生命へのバトン。強い衝撃と感動を覚える。何とかキャンバスに留めたいとそれ以来苦戦を続けている。

■会員になってやりたいこと

日々エネルギーが目減り感動の中身も時と共に変わる中、ひまわりを追い続け、思いも寄らぬ会員となりました。改めて作品や機関紙等再読しました。多様性、創造性、個の尊重等未来への輝きを感じ、それと同時に自身の幅の狭さを思い、皆様に教えて頂きたいと思いました。



「緑陰に遊ぶ」 F100

檀原 恵子 (だんばら けいこ)

■出身地

長野県

■制作に使う主な素材

油絵具



■自作について

山が好きで、自然の美しさに魅せられてきました。影のゆらぎと輝き、その光と影の中で、未来である子供達の姿をかりて、希望の絵を描きたいと思っています。

現実はいろいろと厳しいことばかりですが、生きる喜びを見いだせるような美しい絵が描けるよう精進していききたいと思います。

■会員になってやりたいこと

会員になったからといって、特段絵に対する姿勢は変わりません。おごらず、感動することを忘れず、自然から学び、一筆一筆描き続けられたら何より嬉しく思います。会員として少しでも良い絵が描けるよう頑張っていきたいと思っています。



「秋想」 F100

藤木 もとひろ (ふじき もとひろ)



■出身地

大阪府

■制作に使う主な素材

油絵具、透明水彩絵具

■自作について

幼い頃アンドリューワイエスの絵を見て以来人物画に興味を引かれるようになりました。

描く機会を得てからは「想い」を表現する事に重点を置き、感覚的に捉えているそれらを可視化するにはどうすれば良いのか試行錯誤する過程にも楽しさを見いだすようになりました。

いつか描こうとしている「想い」が見る人の心情に触れるそんな作品となるよう精進していきたいと思っています。

■会員になってやりたいこと

絵に費やす時間を増やし真っ直ぐに向き合って自分なりの絵画表現を見つけて行きたいと思っています。また、主体美術協会の会員として微力ながら会のお手伝いにも尽力したいと思っています。

第59回主体展 受賞者

新会員 3名

遠藤 照美(神奈川県)

檀原 恵子(東京都)

藤木もとひろ(東京都)

秀作作家 19名

遠藤 照美(神奈川県)

喜々津宏恵(東京都)

熊谷千代子(茨城県)

小林かずこ(東京都)

佐竹 照代(愛知県)

立川 広己(埼玉県)

田中未知世(神奈川県)

檀原 恵子(東京都)

津田テリー直美(東京都)

土川 祐子(千葉県)

伴 幸治(神奈川県)

東堤 友美(東京都)

日比野美穂(三重県)

藤木もとひろ(東京都)

本間 由佳(神奈川県)

村野 雄亮(東京都)

山口 泰史(愛知県)

吉村 雅至(東京都)

渡部 尚子(埼玉県)

佳作作家 8名

李 叡潏(千葉県)新人賞

伊藤陽々咲(東京都)新人賞

岩江 柚奈(三重県)新人賞

加賀谷 豊(千葉県)

陰山 晴美(神奈川県)

箱崎 理恵(三重県)

宮内 和(東京都)

宮本 翔(神奈川県)新人賞



▲第10室 会場研究会



▲レセプション 受賞者紹介

没後20周年 『大野五郎展』

今年主体展は創立60周年を迎えますが、2006年に96歳で亡くなるまで、常に会の中心作家として活躍された画家、大野五郎の没後20周年に重なることから会場内に企画コーナーを設け、氏の画業を回顧する展示を行うことになりました。

18歳で一九三〇年協会展に入選後、二科展、独立展、新人画会展を経て1947年自由美術家協会会員となり1964年の主体美術協会創立に参加し、創立時の仲間が世を去ったあとは会の最長老として象徴的な存在になりました。明治、大正、昭和、平成にわたり最後まで現役の画家として飄々と生きた氏の足跡は、あとに続く者にとって力強い道しるべとなりました。企画展では油絵、素描の他、関連の印刷物を展示する予定です。



「セーヌの船着場」 M10



大野五郎

Ono Goro

1910～2006 年



北区赤羽・いけ増にて 吉田氏、大野氏、吉井氏（1984年）



久保田孝司遺作展にて 寺田氏、大野氏（1985年）



南イタリア・スケッチ旅行にて 磯村氏、大野氏（1995年）

大野五郎氏プロフィール

1910年 東京都に生まれる
1926年 藤島武二に薦められて川端画学校に入り、中間冊夫・田中佐一郎・小野幸吉と出会う
1928年 「一九三〇年協会展」入選
1929年 里見勝蔵に師事、一九三〇年協会美術研究所に学ぶ
1930年 「一九三〇年協会展」にて協会賞受賞、二科展出品、兄の四郎（詩人・逸見猶吉）から神楽坂のバー「ユレカ」を引き継ぐ。詩人・高橋新吉、草野心平らが集まる
1931年 「第1回独立美術協会展」に出品しO氏賞受賞

1943年 鏗光、麻生三郎、糸園和三郎、井上長三郎、鶴岡政男、寺田政明、松本竣介と「新人画会」を結成
1947年 「自由美術家協会展」に参加し会員となる
1964年 「自由美術家協会」を退会し「主体美術協会」を結成
1965年 「国際形象展」出品
1979年 八王子市元八王子にアトリエを移す
2006年 八王子市夢美術館での「大野五郎 画業 80 年の軌跡展」開催直前の3月に逝去 享年 96 歳

アトリエ訪問 vol.14

『宮林さわ子さんのアトリエを訪問して』

愛知県豊橋市

取材／主体美術中部の4名 文／久我 英輔



▲制作中の組作品（この時はまだ作品の組み合わせを色々変えて模索中とのことです。）
今年3月中部主体作家展出品予定。題名「今を生きる・ひとかたち」



▲アトリエの壁面
壁面にはドローイング、シャツを液体粘土で固めたもの、宮林さんとしては珍しい風景画などが掛けてあった。

今回、アトリエ訪問で宮林さんにお話を伺うにあたり、前もって以下のことについて教えていただいた。

(1)好きな作家や影響を受けた人は？

画 家／フランス・ベーコン、宮崎進
寺田政明、中島佳子（主体美術）
彫刻家／イサム・ノグチ
写真家／藤原新也
舞踏家／土方異

(2)題材・テーマは？

人体をモチーフに、人間の光と影の有り様を描いてきた。

〈人間遺跡シリーズ〉

人体の中に自然も宇宙もあると思え、赤茶けた大地の色の人体の中に跡、揺らぎ、穴を描く。（シルクロードの旅より）

〈舞人シリーズ〉

森・海・大地の心象風景とのせめぎあいの中で、動きのある人体を描く。この頃から、テーマとしても、造形的にも、相反するものを同時に描くようになり、1枚の絵に完結せず、おのずと組作品となる。時間の流れ、空間の広がりを意識するようになる。

〈ドローイング〉

シャツや足袋を液体粘土で固めたり、針金を曲げたりしてドローイング。自然と沢山のフォルムが生まれ楽しく、解放される。かつての木炭やコンテパステルによる人物デッサンの時のような解放感を味わう。

(3)作品を作る上で大事にしていることは？

細密な具象でもなく、モダンな抽象でもない。時代遅れかもしれないが、常に模索し、抽象と具象の間をせめぎ合いながら、自分にしか描けない絵に挑戦したい。

アトリエ訪問の当日、主体美術中部の4名で宮林さんのアトリエに伺った。ドローイングや版画の作品、個展やグループ展のポートフォリオ等を拝見して作品に取り組む意欲的な姿勢を感じた。宮林さんは大学時代は墨書にも取り組まれていたそうで、人物を題材にしたドローイングにはその要素があった。踊る人物の一瞬を描きたいという気持ちが次々に作品に向かう姿勢に繋がっているのではないだろうか。

アトリエの壁面には、制作中の作品（Sサイズの組作品）があり、その題材についてもお話をいただけた。作品は大正時代の着物、愛知県豊橋市二川の蔵の壁（宮林さんはこうした建物での作品展示や建築物保存活動にも取り組まれている）、浜名湖の暖かな海、人物の足の裏、皺のある人物の唇、お孫さんの後頭部などを構成して描いている。それぞれが単独の作品であるのだが、配置を変えて見せていただくことで、また新しい印象を受ける。「一枚の絵画では、表現しきれず、組作品の形を取ることで、表現が完成する」とのお話どおりであった。

宮林さんの大作は補色を用いた視覚的に目を引く作品が印象的である。その色彩について尋ねると、「油絵は絵具を乗せていくことだとすると、薄く重ねていくことが好きな自分には、洋画は体質的にあっていたのかと考えるときもある」と言われていた。学生の時には染色作家を目指していたそうで、日本的、アジア的な色彩の要素が好きということも、一見で宮林さんの作品と分かる力強さの根底にあると思った。

アトリエ訪問については以上となる。アトリエには人物画（女性の小作品シリーズ）も並べられていた。それらの作品からは、宮林さんが関わった人物に魅力を感じ、描いた人物そのものを大切にしたいという思いが伝わってきた。

長崎のこと

山崎 清子(神奈川県)

幼い頃、母方の祖母も一緒に暮らしていた。母は仕事をしていたので、その間祖母が私たち姉妹の面倒を見てくれた。私の住まいは長崎市内からトンネルを抜け、日見峠を越えて海に向かったところにあった。10分歩けば海があり、15分歩けば枇杷や蜜柑の段々畑があるのどかな小さい町で、その昔は日見村と呼ばれていた。家の隣には小さい畑があり、祖母が菜葉やジャガイモ、葱やとうもろこしやトマトや茄子、苺も育てていた。

祖母は校長先生だった祖父のもとに後妻として嫁いだ。最初の夫は病弱で若くして亡くなり、その嫁ぎ先から、祖父にどうしてもと望まれての再婚だった。先妻の子供は3人で、長男、長女、次女、その後、末っ子の母を含めた3人の子供が生まれた。「お父さんは、よか男じゃなかったばってん、よう反物ば土産に買ってきてくれて、借錢だけはせん人やった。」と母に話してくれていた。裕福ではない暮らしの中、祖父は機会があれば着物の反物を祖母に贈り、決して借金をしない誠実な人だったという。その反物でこしらえた着物は、戦時中僅かなお米やお砂糖に変わった。祖父は母が幼い頃に脳溢血で亡くなったので、祖父の記憶は祖母の話からだけなのだけれど、母には祖父の懷に抱かれて、庭を散歩した温かな記憶があるという。祖母は生徒たちが家に来た時はおにぎりを食べさせ、生徒の親でもある漁師の奥さんたちが行商に来た時は、必ず一番上等の魚を買い取っていた。家計が厳しくても、もっと大変な人を目の前にすると、何もしないではいられない。その頃はお互いにそうして助け合って暮らしていたそうだ。



▲大浦天主堂横、石畳の階段

祖母と過ごした幼い頃の記憶、祖母はものを大切にする人だったので、古いセーターをほどいた毛糸で編み物を教えてくれたり、着物の端切れに小豆を入れてお手玉を作ってくれた。そんな時に、不意に声を震わせ涙声で8月9日のことを口にする。長崎に住む人にとって忘れ得ぬ一日、原爆が投下された日のこと。その日長女は長崎市街に出かけていたそうだ。「ピカドンが落ちて、リヤカーを引っ張って、娘を迎えに行った。街中を探してやっと見つけた娘は身体中にガラスの破片が付きささっとった。リヤカーに乗せてやっと家に連れて帰ったばってん、苦しんで苦しんで死なせてしもた。」と泣いた。そしてこの話を幾度となく繰り返し、幾度となく泣いた。きっと長崎に住む人はみな同じような経験をして、その家族はなす術もなく黙って聞いたのだと思う。決して癒えることのない悲しみに途方に暮れながら。

毎年8月9日夏休みの登校日にサイレンの音とともに黙祷をし、被爆体験を若い世代に語り継ぐ語り部の方々から原爆の話を聞いた。私はその話が恐ろし過ぎて、ただじっとその時間が過ぎるのを待った。心を遠くにおいていたので、語り部の方々の話は何一つ憶えていない。友人と原爆について語り合うこともなかった。誰も口にしなくなかったのだと思う。話したら悲しみにのみ込まれてしまうような気がして、できるだけ原爆のことから目を逸らして生きていた。けれど、当然のことなのだ。絶対に長崎や広島に起こったことは繰り返してはいけない。それだけはわかっていた。長崎から遠く離れて40年ほどになる。8月9日、もうサイレンの音は聞こえないけれど、11時を過ぎると目を閉じて祈る。同じ長崎に生まれた夫が家に帰ると、「黙祷した?」と私に聞き、「うん。」と答える。長崎に落とされた原爆について、たったそれだけの言葉を交わす。

昨年長崎を訪れた。友人たちが出迎えてくれて、一緒に長崎を巡ってくれた。ともに過ごした高校や、諏訪神社、伊王島、大浦天主堂、卒業アルバムの写真を撮ったオランダ坂、稲佐山、眼鏡橋。長崎にいた頃はこの窮屈な場所から抜け出たくて仕方なかった。けれど今は石畳の細い坂道や階段、海辺に佇む鳩や、路面電車が走る何気ない風景に心惹かれている。友人たちと一緒に見る長崎は、どこを見ても懐かしくて穏やかで温かい。80年前、地獄と化したとはとても思えない美しい長崎。

もし祖母があの日母を連れて街中に出かけていたら、祖母も母も被爆し、私はここに存在しない。祖母は戦後の貧しさに折れることなく、女手一つで子供達を育て、私たち孫の面倒も見て、92歳まで生きた。小さくて、か細くて、優しく、長年の畑仕事で腰は曲がっていたけれど、凜とした人だった。祖母が母を生み、母が私を生んで、私が娘を生み、娘に子が生まれた。この緑児が見る世界は、光に溢れて、美しい色に満ちていることを願う。祖母や母が紙一重のような運で生きてくれたから、生命がこうして繋がったのだと思う。母子像が何故描かれてきたのか、子を抱く娘の姿を見て初めてわかったような気がした。この子もいつか長崎を訪れるだろう。そしていつか、祖母のこと、8月9日の長崎のことを伝えようと思う。

各地の
美術館から

「たいせつなものⅠ」新収蔵作品展2015~2019

神奈川県立近代美術館鎌倉別館

榎本香菜子(神奈川県)



▲「蛙」1959年

冬の散歩は気持ちが良い。12月22日穏やかな陽ざしのもと鎌倉鶴岡八幡宮を抜けて、神奈川県立近代美術館の別館に向かった。

神奈川県美(略)は何と日本で一番古い公立近代美術館、1951年開館。私が生まれた年でもあり、6年間通った女学校が鎌倉だったので、とても親しみがある。香月泰男、クレー、ムンク、ルドン、キリコの原画を見たのは、この美術館が最初だったように思う。蓮池に浮かぶように素晴らしい坂倉準三の建築、鎌倉館は、鶴岡八幡宮との土地貸借契約が満了となったことで閉館し、2003年葉山館が開館した。1984年に開館した別館だけが今、鎌倉に残る。

さて、今回の「たいせつなもの」パートⅠには小野絵麻さん(1917-1997)の「蛙」「南無」が出品されている。展示スペースは2階のみのこじんまりした会場。左奥にその絵はあった。主体展では小野さんの絵にいつも注目していた。岡山の作家なのでお会いすることはなかったけれど、御長女の小野絵里さんも画家で同じ展覧会に出たご縁で遠い存在ではなかった。「蛙」は1959年作、板に油彩122×83センチ。デフォルメされた蛙を見ていると、人があぐらをかいた後ろ姿を見るようでも

◀小野絵麻氏
1972年自宅にて

ある。人の後ろ姿というものは年が如実に表れ、生き様まで見えてくるような気がする。画面いっぱい描かれた「蛙」は愛嬌もありドーンと構える。背景は蛙の明るいトーンから深く豊かな暗い色調。大地に足をつけ懸命に生きているパワーに溢れている。

1934年現・筑波大学に入学し美術教育に従事するも、日中戦争で中国に渡り傷痍軍人となる。復職してからは1トン爆弾により教え子の散華。岡山に疎開し、よそ者に冷たい空気に人間のエゴを味わう。おまけに留守中、近所からの類焼で全作品、全資料焼失。新築後は新幹線開通の為に強制撤去。何より悲しかったのは制作の時間が雑事で奪われたことだという。

美術評論家、東野芳明、本江邦夫にも評価された。また、そこで地方で活動する優れた画家を取り巻く日本の美術状況にも触れ惜しまれてもいる。しかし、そんなことをものともしない、小野さんの制作への強靱な姿勢をみる。現実から目を背けることなく戦後日本の腐敗した姿をじっと見続け、それらをユーモアを交えて表現した。「裏道がお好き」「漂流・怒る魚」だの「不安な風に風見鶏鳴く」だの、タイトルだけでも興味深い。

ちなみに小野絵麻さんの本名は春治(はるじ)。なぜ絵麻さんになったかといえば、独立美術に出していたながら、内緒で1954年自由美術に二人のお嬢さん絵里、麻里の名からとりペンネームとし出品したのがきっかけ。その作品が美術誌上で注目されてしまい引くに引かれず雅号となってしまったのだった。

会場には、主体美術から別れ新作家協会を結成した中野淳さんの作品もあった。主体美術60年の歩みをふと感じた展覧会でもあった。

神奈川県立近代美術館
別館▶

展覧会記録

2024年9月～2025年4月下旬

■Exhibition twice up! Ⅷ Part1
(北村奈美、新島知夏、前川アキ)
9月2日～9月8日
あかね画廊(銀座4)
■第39回日本の海洋画展
(佐藤善勇、手塚國彦他)
9月4日～9月8日
東京芸術劇場5階展示ギャラリー(西池袋)
■金オーロ遊び展(斉藤望、種倉紀昭他)
9月7日～9月25日
アートスペース泉(福島県いわき市)
■Exhibition twice up! Ⅷ Part2
(上野信彦、大西佐頼、福田和幸、前山陽子)
9月9日～9月15日
あかね画廊(銀座4)
■第46回北海道ロビー絵画展
(齋藤典久、佐藤善勇、續橋守他)
9月10日～9月18日
ギャラリー絵夢(新宿3)
■詩画展(石田俊哉、續橋守、藤原アツ他)
9月16日～9月22日
画廊 楽Ⅱ(横浜市中区)
■5人展—交差する刻—(柴田かよ子他)
10月1日～10月6日
ギャラリー名芳洞(名古屋市中区)
■シュルレアリスム宣言100年記念
「溶ける魚孤独な鳥」(榎本香菜子他)
10月9日～10月19日
PóRtoLibRE(杉並区高円寺)
■～山本靖久展—共生・Symbiosis・
立体作品による～
10月18日～10月26日
ギャラリーアルトン(南青山5)
■保坂淳展
10月24日～11月5日
画廊ジュリア(千葉市)
■草莽の風展(松本恵美他)
10月28日～11月2日
銀座K's Gallery(銀座1)
■Peace Piece —板絵to金属—松尾陽子展
11月5日～11月10日
ギャラリー&工房あぶら(京都市上京区)
■岡本裕介個展
11月5日～11月10日
ギャラリー中井(京都市)
■【象の内・外】2024(長沢晋一他)
11月7日～11月17日
ギャラリー絵夢(新宿3)
■小菅光夫作品展
11月16日～11月24日
宝登山神社・記念館(埼玉県)
■榎本香菜子展 —Telling The Bees—
11月18日～11月23日
シロタ画廊(銀座7)

■山崎弘展
11月19日～11月24日
兜屋画廊(銀座6)
■アラキアツコ、伊豆倉哲、やまぐちひろゆき
3人展
11月21日～11月26日
Art Space88kunitachi(国立市)
■PARADE2024
(伊藤明美・水谷幸子他)
11月26日～12月1日
ギャラリー名芳洞(名古屋市中区)
■第63回神奈川県女流展
(内田結美子、森脇ヒデ他)
11月27日～12月2日
横浜市民ギャラリー(横浜市西区)
■rotondo(山本靖久他)
11月27日～12月2日
日本橋高島屋S.C.6階美術画廊(日本橋2)
■リラの森・展(續橋守他)
12月2日～12月8日
画廊 楽Ⅱ(横浜市中区)
■Focus展(水谷幸子他)
12月3日～12月8日
ギャラリー名芳洞(名古屋市中区)
■日々のよもやま話「沁み滲み」
本間由佳個展
12月3日～12月15日
CHARLOTTE.USAGI(横浜市中区)
■飛鳥山アートギャラリー
北区所蔵美術品展(大野五郎作品展)
12月7日～6月29日
北区飛鳥山博物館飛鳥山アートギャラリー
(北区王子1)
■Ange de Noël 19(山本靖久他)
12月12日～12月26日
ギャラリー絵夢(新宿3)
■井上樹里個展「離れても、寄り添う。」
12月16日～12月22日
あかね画廊(銀座4)

2025年

■GAHコレクション～日本の風景と彫刻・
オブジェ～(續橋守、井上俊郎、吉江新二、
深見公道、吉井忠他)
1月7日～1月12日
銀座アートホール(銀座8)
■_hirosato_/佐藤かな/太田琴乃展
(太田琴乃他)
1月9日～1月14日
一口坂ギャラリー(千代田区九段南4)
■山口長男☆野見山暁治と実専展
(長沢晋一他)
1月9日～1月18日
銀座ギャラリームサシ(銀座1)

■青羊会(井上樹里他)
1月18日～1月26日
ギャラリー・コバンダール(京橋2)
■新春展(長沢晋一他)
1月10日～1月18日
ギャラリーGK(銀座6)
■新春ガラス絵展
(井上樹里、中村輝行、山本靖久／特
別出品:中城芳裕他)
1月13日～1月18日
ぎやらりいサムホール(銀座7)
■浅野修展
1月21日～2月1日
銀座K's Gallery(銀座1)
■第9回M-art'79展(山崎弘他)
1月27日～2月1日
画廊宮坂(銀座7)
■第3回箔絵展(斉藤望、山本靖久他)
1月27日～2月2日
あかね画廊(銀座4)
■憧憬展Ⅲ(本間由佳他)
1月30日～2月4日
文房堂ギャラリー(神田神保町1)
■ウクライナ絵画展—子どもの目から
見た世界—(浅野修他)
2月1日～2月28日
日本外国特派員協会(千代田区丸の内)
■主体展秀作家(2024)と会員小品展
2月6日～2月11日
ヒルトピア・アートスクエア
(新宿区西新宿)
■夢美セクション展(大野五郎他)
2月8日～3月23日
八王子市夢美術館(八王子市)
■オマー・ジュ宮沢賢治
幸福へのいざない展(保坂淳他)
2月9日～2月16日
市川駅前ミュージアム(千葉県市川市)
■PARADE2025
(伊藤明美、伊藤吉一、片岡美鈴他)
2月11日～2月16日
ギャラリー名芳洞(名古屋市)
■ECRU展(齋藤典久、上野信彦、長
谷川好美、山田加代子、東堤友美他)
2月11日～2月16日
銀座アートホール(銀座8)
■結城智子・中嶋修二人展
2月24日～3月2日
あかね画廊(銀座4)
■第8回弥生のに
(井上樹里・山本靖久他)
2月24日～3月8日
始弘画廊(南青山5)
■水村喜一郎デッサン展 —下町を描く
3月3日～3月15日
ギャラリー川船(京橋3)

■Women's Art Works 女の仕事展
13th(柴田かよ子、水谷幸子他)
3月4日～3月9日
愛知県美術館ギャラリーG室(名古屋
市東区)
■第58回主体美術中部作家展
3月4日～3月9日
愛知県美術館ギャラリーE・F室(名古屋
市東区)
■名芳洞感謝祭 -Muchas graciasu-
(伊藤明美、水谷幸子他)
3月4日～3月16日
ギャラリー名芳洞(名古屋市中区)
■第57回主体美術神奈川作家展
3月4日～3月10日
横浜市民ギャラリー(横浜市西区)
■主体美術6人展—矢野利隆—を囲ん
で—(榎本香菜子、齋藤典久、長沢晋
一、矢野利隆、山本靖久、結城智子)
3月5日～3月16日
GALLERY SHIMIZU(横浜市中区)
■第15回輪展(齋藤典久他)
3月10日～3月15日
銀座K's Gallery(銀座1)
■第2回6人展(井上樹里他)
3月22日～3月30日
ギャラリー884(文京区本郷3)
■第10回自由律の俳人
尾崎放哉との対峙(齋藤典久他)
3月25日～3月30日
ゆう画廊5F・6F(銀座3)
■高瀬美和子個展
3月31日～4月5日
ギャラリー暁(銀座6)
■續橋守絵画展
4月8日～4月13日
ラディアン展示ギャラリー(神奈川
県中郡二宮町)
■第53回主体美術武蔵野作家展
4月8日～4月13日
埼玉県立近代美術館B1階(さいた
ま市浦和区)
■岩見健二洋画展
4月9日～4月15日
あべのハルカス近鉄本店タワー館11
階 美術画廊(大阪市阿倍野区)
■ギャラリーミロ30周年記念展
(長崎羊子他)
4月9日～4月19日
ギャラリーミロ(横浜市中区)
■モノクローム・白と黒の世界-
(長沢晋一他)
4月14日～4月19日
ギャルリー志門(銀座6)

※ホームページに展覧会情報の掲載を希望される方は、DMを事務局
研究部 小林 までお送りください。その情報は機関紙にも反映されま
す。(会員・出品者を問わず掲載いたします)

編集後記

■最近テレビニュースが始まると、ガラガラと不快な声とともに、見たくない人物
が現れる。なので、すかさずチャンネルを変える。ところが、この人は必要に私を
追い回す。何処のチャンネルにも同じ顔で似たようなポーズで登場する。しかも、
時間帯に関わらず毎日。腹立たしくもあり、うんざりし、落ち込んでしまう。結局電
源を切ることになる。最近はテレビを見る時間が少なくなった。(桑原雄一)
■機関紙の校正に初めて参加しました。116号が出来上がっていく様子の中か
ら見ることで、感慨深いものがあります。主体展に出す前からHPの機関紙を
読み、出品してからは毎月届けられる機関紙に励まされて制作していました。特
に夏の暑い時期、主体展搬入の少し前に届く機関紙は、あともう少し頑張ろうと
絵に向かわせてくれました。機関紙に携わることができてとても嬉しく思います。
よろしく願いいたします。(山崎清子)
■事務局が新しい体制になりました。私は相変わらずですが、機関紙に山崎さん
が加わり3人体制でやっていきます。以後よろしく願いいたします。最近、展覧
会やギャラリーに足を運ばなくて、絵を見て感動する機会が少なくなりました。か
わりに周りの自然や空の色、山や花の美しさに見惚れることが多くなりました。こ
の感動を素直に絵にできない自分が腹立たしいです。歳のせい、殺伐とした絵
よりも、心を和ませてくれる作品に気持ちは移っているようです。(山田礼二)

機関紙「主体美術116号」制作スタッフ

■事務局作業者	■執筆者	矢野 利隆	■校正	返町 勝治
山崎 弘(責任者)	山崎 弘	返町 勝治	山崎 弘	齋藤 典久
山田 礼二(機関紙部)	藤本 卓	久我 英輔	黒川 洋	長沢 晋一
桑原 雄一(機関紙部)	井上 樹里	山崎 清子	桑原 雄一	前川 アキ
山崎 清子(機関紙部)	竹内小夜子	榎本香菜子	山崎 清子	他 執筆者
黒川 洋(会計)	田中 和枝		藤本 卓	■巻頭カッ
齋藤 典久(展覧会部)	松本 恵美		井上 樹里	宮林さわ子

2025年度事務局体制

■責任者／山崎 弘 ■会計／黒川 洋
■展覧会／齋藤典久・藤本 卓・吉田 正・大西佐頼
■研 究／小林宏至(DM受付担当)・井上樹里(ホームページ)・落合梨乃
■広 報／【図録・出版】北村奈美・金沢綾子
【機関紙】山田礼二・桑原雄一・山崎清子
【発送】坪井健一 【広告】長谷川好美

◆巡回展／名古屋：三浦洋次

2025年 第60回記念主体展 日程

本 展／東京都美術館(上野公園)
2025年9月2日(火)～9月17日(水)15日間(16日は休館)
公募搬入／2025年8月22日(金)・23日(土) 東京都美術館地下3階
名古屋展／愛知県美術館8F
2025年12月23日(火)～2026年1月4日(日)
(12月28日～1月3日は休館)